

# 特別支援教育研究論文集

—令和7年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

知的障害のある児童生徒における  
「キャリア・パスポート」の作成・活用に関する実践的研究

青森県立八戸第二養護学校

教諭 松橋 孔亮

令和8年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

## 目 次

要旨	1
第1章 はじめに	2
第1節 研究の背景と目的	2
1 研究の背景	2
2 研究の目的	4
第2章 「キャリア・パスポート」の活用に関する課題と 教員研修の効果を明らかにする研究	4
第1節 研究の方法	4
1 【研究①】 学校現場における成果と課題の整理のためのインタビュー調査	4
2 【研究②】 教員を対象とした研修会と教員の変化を 分析するための質問紙調査	5
第2節 【研究①】 学校現場における成果と課題の整理のためのインタビュー調査	5
1 調査の目的と方法	5
2 調査の結果	6
3 考察	6
第3節 【研究②】 教員を対象とした研修会と教員の変化を分析するための質問紙調査	9
1 研究の目的	9
2 研修会の方法	9
3 質問紙調査の方法	10
4 結果と考察	10
第4節 まとめ	16
第3章 「キャリア・パスポート」の様式改善と活用に関する実践研究	17
第1節 研究の目的と方法	17
1 研究の目的	17
2 研究の方法	18
第2節 キャリア教育に関する研修会	18
1 研修会の概要	18
2 研修会後の教員の感想	19
第3節 「キャリア・パスポート」の様式検討に関する取組	19
1 様式検討会の実施と課題の整理	20
2 課題を踏まえた様式改善の取組	21
第4節 令和7年度実践のまとめ	26
1 質問紙調査の結果	26
2 考察	29

第4章 総合考察	31
1 2年間を通じた研究のまとめ	31
2 今後の展望	32
引用文献	34
参考文献	34
謝辞	35

## 要旨

キャリア教育は、児童生徒が自己理解を深め、将来の社会的・職業的自立に向けた基盤を形成することを目的として、学校教育全体を通して計画的・継続的に行われるものである。その中で、2020年度より全国の学校で導入された「キャリア・パスポート」は、学習や学校生活を振り返り、自己評価や意思決定につなげるための重要なツールとして位置付けられている。

一方、特別支援学校（知的障害）においては、知的障害のある児童生徒の特性により、自己の経験や学習を振り返り、それを言語化・記述することに困難さが伴う場合が多く、「キャリア・パスポート」の作成および活用に課題が生じている。また、教員においても、キャリア教育や「キャリア・パスポート」に関する体系的な研修の機会が十分とは言えず、指導方法や評価の在り方に不安を抱えながら実践している実態が見られる。

このような背景を踏まえ、本研究では、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用に関して、教員が指導の過程で感じている成果と課題を明らかにするとともに、それらの課題に対応した支援の在り方について、教員研修および様式改善を通して検討することを目的とした。

研究は、令和6年度および令和7年度の2年間にわたり、段階的に実施した。令和6年度には、特別支援学校（知的障害）の教員を対象としたインタビュー調査を行い、「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導に関する実践上の成果と課題を整理した。あわせて、調査結果を踏まえた教員研修を実施し、研修前後の質問紙調査を通して、教員の指導観や児童生徒の変容に対する実感の変化について検討した。続く令和7年度には、前年度の成果と課題をもとに、「キャリア・パスポート」の様式および運用の在り方に着目し、様式の検討および改善を行うとともに、改善後の様式に対する教員の捉え方を整理・検証した。

本研究の結果から、教員研修と様式改善を組み合わせた段階的な取組は、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用を見直す上で、有効な視点となる可能性が示された。また、本研究は、教員の意識や指導観への働きかけと、教材・様式といった指導の枠組みへの働きかけを関連付けて検討した点に特徴がある。これらの取組を通して、学校現場における実践の積み重ねをもとに、「キャリア・パスポート」の活用の在り方を検討するための基礎的な知見を得ることができたと考えられる。さらに、本研究で得られた知見は、各学校の実態や教育課程に応じた工夫や改善を検討する際の参考となる可能性がある。今後は、児童生徒一人一人の変容をより丁寧に捉える視点や、学部間・学年間での継続的な活用の在り方についても検討していく必要がある。また、学校全体として「キャリア・パスポート」をどのように位置付け、共有していくかという点も、引き続き課題として整理していくことが求められる。本研究は、知的障害のある児童生徒の実態に即したキャリア教育の充実に向けて、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用について整理・検討したものである。

キーワード：「キャリア・パスポート」、キャリア教育、知的障害、教員研修、様式改善

## 第1章 はじめに

### 第1節 研究の背景と目的

#### 1 研究の背景

##### (1) 「キャリア・パスポート」の意義

学習指導要領の総則においては、キャリア教育について、児童生徒が「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」<sup>1)</sup> について明示された。また、同じく特別活動については、学級活動の内容に「一人一人のキャリア形成と自己実現」が明示され、その内容の取扱いでは、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童（生徒）が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」<sup>1)</sup> とされたところである。

また、文部科学省では、2019年3月29日付け事務連絡において、児童生徒が活動を記録し蓄積する教材として「キャリア・パスポート」の例示資料及び指導上の留意事項等について示し、2020年4月から実施するよう通知がなされた。本通知では、「キャリア・パスポート」について、「児童生徒が小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオ」<sup>2)</sup> と定義された。つまり、「キャリア・パスポート」は、特別活動を中心として、キャリア教育の充実のために、児童生徒自らが学ぶことと自らの将来を見通すことができるツールとして機能することを期待して導入されたといえる。

##### (2) 青森県における「キャリア・パスポート」作成、活用の状況

青森県教育委員会では、国のキャリア教育の定義や捉え方を基本としながら、キャリア教育を通してどのような人間を育てるのかを明確にした上で、キャリア教育を「青森県の子どもたち一人一人の社会的・職業的自立に向け郷土に愛着と誇りを持ち、チャレンジ精神あふれる人間として育つよう、必要な基盤となる資質、能力、態度を培うことを通して、キャリア発達を促す教育」<sup>3)</sup> と定めている。

また、国から例示された基礎的・汎用的能力をもとに、青森県のキャリア教育で培いたい資質、能力、態度を「キャリア教育で培いたい資質、能力、態度を支える心（自分自身を大切に思う気持ち、ふるさとを誇りに思う気持ち）と、キャリア教育で培いたい資質、能力、態度（自己を見つめる力、つながる力、動く／生かす力、創り出す力）」<sup>3)</sup> と示し、取り組んできた。

さらに、「キャリア・パスポート」については、2014年度から児童生徒がキャリア教育に係る活動を記録し蓄積する教材として「あおもりっ子キャリアノート明日へのかけ橋」を作成し、小学校から高等学校、その後の進路も含め、学校段階を越えて活用できるものとなるよう取り組んできた。そうした背景を踏まえ、2020年4月から「キャリア・パスポート」の運用を開始するにあ

たり、学習指導要領及び関係通知を踏まえ、県内各地域の実情や各学校及び学級における創意工夫を生かした形での活用が可能となるよう、従来のキャリアノートを見直し、新たに「あおりっ子キャリア・パスポート～明日へのかけ橋～」を作成、例示し、特別支援学校を加えて、青森県内のすべての小・中学校、高等学校、特別支援学校で取り組んでいる。

### （３）研究対象校における「キャリア・パスポート」作成、活用の状況

本研究の対象校は、青森県内の特別支援学校（知的障害）２校（青森県立八戸第二養護学校（小学部、中学部）、青森県立八戸高等支援学校（高等部産業科、高等部普通科）である。両校ともに、2020年４月から「キャリア・パスポート」の運用が開始されており、青森県教育委員会から例示された様式を活用したり、各学校の児童生徒の実態に合わせて内容を一部変更したりしながら運用を進めている。

特別支援学校における「キャリア・パスポート」の運用について、石川ら（2024）は「特別支援学校においては、個別の教育支援計画や個別の指導計画との違い、それらがある中での「キャリア・パスポート」の必要性、さらに利活用の方法については必ずしも十分な検討がなされていない。その理由として、「キャリア・パスポート」に対する認知が現場の教員に行き届いていないという可能性が考えられる」<sup>4)</sup>と指摘しているが、青森県でも同様の状況があることが予想される。後述の質問紙調査で実施した「キャリア教育、「キャリア・パスポート」に関する研修に参加した経験はありますか」という質問においては、「はい」と回答した教員の割合は34%であり、66%の教員は研修等の機会がないまま「キャリア・パスポート」の運用に取り組んでいる状況が明らかになった。そのため、「キャリア・パスポート」の目的や意義、指導の方法や活用等において、自信がないと感じている教員が多く、運用開始から５年が経過した今、「キャリア・パスポート」の運用に懐疑的であったり、負担感を感じていたりしている教員が少なくないことが予想される。

### （４）知的障害のある児童生徒における「キャリア・パスポート」作成、活用の状況

「キャリア・パスポート」を活用し、学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うためには、「学習活動の振り返り」や「学習状況等の記録」、「自己評価」や「意思決定」などの学習プロセスが重要であるが、知的障害のある児童生徒の場合、藤川ら（2024）が、「知的障害のある児童生徒は、記憶の保持や想起、思いの言語化等の課題を有することから「自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったり」することや「自身の変容や成長を自己評価」し、それを記述することの困難さがあると考えられる。そのため、知的障害のある児童生徒の「キャリア・パスポート」における作成の困難さに着目し、特別支援学校（知的障害）の「キャリア・パスポート」の活用について検討する必要がある」<sup>5)</sup>と指摘しているように、各学習プロセスにおいて、障害特性による学習の困難さがある。そのため、知的障害のある児童生徒における「キャリア・パスポート」の作成、活用に伴う困難さに着目し、指導・支援の工夫についてさらなる検討が必要であると考えられる。

## 2 研究の目的

本研究の目的は、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の作成および活用に関して、教員が指導の過程で感じている成果と課題を明らかにするとともに、それらの課題に対応した支援の在り方について、教員研修および様式改善を通して検討することである。

具体的には、令和6年度において、特別支援学校（知的障害）の教員を対象としたインタビュー調査を実施し、「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導に関して、学校現場における実践の成果と課題を整理する。あわせて、インタビュー調査の結果を踏まえ、教員が課題を感じている点や支援の工夫を中心に整理し、教員を対象とした研修会を実施する。さらに、研修会の前後で質問紙調査を行うことにより、研修会の実施が、教員の指導観や「キャリア・パスポート」に対する捉え方、ならびに自己評価および意思決定の指導における児童生徒の変容に対する実感にどのような変化をもたらすのかを明らかにする。

続く令和7年度には、令和6年度の研究によって明らかになった成果と課題を踏まえ、「キャリア・パスポート」の様式および運用の在り方に着目した実践研究を行う。具体的には、教員を対象とした研修会を継続的に実施するとともに、教員の意見や実践上の課題をもとに様式の検討および改善を行い、改善した様式に対する教員の捉え方や評価を整理・検証する。

以上のように、本研究は、令和6年度および令和7年度の2年間にわたり、インタビュー調査および質問紙調査による実態把握と分析、教員研修による指導観への働きかけ、ならびに「キャリア・パスポート」の様式改善という段階的な取組を通して、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の効果的な作成・活用の在り方について実践的に検討することを目的とする。

## 第2章 「キャリア・パスポート」の活用に関する課題と教員研修の効果を明らかにする研究

### 第1節 研究の方法

本研究では、特別支援学校（知的障害）の教員が、「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導において抱える課題を整理し、それをもとに教員の指導力向上を目指すことを目的として、以下の【研究①】と【研究②】を実施する。

#### 1 【研究①】学校現場における成果と課題の整理のためのインタビュー調査

特別支援学校（知的障害）の教員が、「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導において抱える課題を整理し、研修会で提供する情報を明らかにすることを目的として、研究対象校の学級担任を対象としたインタビュー調査を実施する。なお、これらを分析した結果をもとに学校現場の課題を体系的に整理し、教員が実践で感じている成功例や改善すべき点を明らかにして、研究②で実施する研修会用資料の作成と、教員の変化を分析するための質問紙調査における調査項目の選定につなげる。

## 2 【研究②】教員を対象とした研修会と教員の変化を分析するための質問紙調査

### (1) 研修会用資料の作成と研修会の実施

研究①のインタビュー調査の結果をもとに、教員が課題を感じている点を明確にした上で整理し、教員を対象とした研修会用資料を作成する。そして、この研修会用資料をもとに教員を対象とした研修会を実施する。

### (2) 研修会の前後で教員に起きた変化を分析するための質問紙調査

インタビュー調査の結果を踏まえ、質問紙調査の調査項目の選定を行った上で、研修会の実施による教員の変化を分析するために、研修会の前後で質問紙調査を実施する。質問紙調査は、研修会の前後で比較検討するため、同じ質問紙を使用する。なお、調査データの分析には、ノンパラメトリック検定（Wilcoxonの符号付順位和検定）を用い、研修会の実施により、教員が「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導で、児童生徒の変容を実感できるようになるかを検証する。

## 第2節 【研究①】学校現場における成果と課題の整理のためのインタビュー調査

### 1 調査の目的と方法

#### (1) 調査の目的

本調査は、特別支援学校（知的障害）の学級担任を対象に、「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導に関する成果と課題の収集を中心として、キャリア教育の理解や「キャリア・パスポート」の作成、活用の学習プロセスにおける支援の工夫、児童生徒の変化、指導における困難さ等について具体的な情報を得るために実施する。得た情報をもとに、【研究②】で実施する研修会用資料の作成と、教員の変化を分析するための質問紙調査における調査項目の選定につなげることを目的とする。

#### (2) 調査の方法

研究対象校の学級担任を対象に、インタビュー調査を実施する。調査で語られた内容をコード化し、各質問項目における成果と課題について分析する。また、分析した結果をもとに現場の課題を体系的に整理し、教員が実践で感じている成功例や改善すべき点を明らかにして、【研究②】で実施する研修会用資料の作成と、教員の変化を分析するための質問紙調査における調査項目の選定につなげる。

1) 実施日：令和6年8月6日（火）～7日（水）

2) 対象：青森県立八戸第二養護学校（小学部職員2名、中学部職員2名）

青森県立八戸高等支援学校（高等部産業科職員1名、高等部普通科職員3名）

計8名

- 3) 内 容：「キャリア・パスポート」の作成及び様式等の状況について  
 学習活動の記録と蓄積について  
 学習活動の振り返りや自己評価について  
 新たな生き方や目標等の意思決定について  
 「キャリア・パスポート」を活用した対話について  
 「キャリア・パスポート」を活用したキャリア教育の推進について
- 4) 実施方法：対面によるインタビュー形式（1名につき45分）

## 2 調査の結果

### （1）各質問項目における学校現場の成果と課題についての回答数

インタビュー調査で得られた教員の回答をコード化し、成果と課題について回答数を比較した結果、多くの項目で課題に関する回答が成果に関する回答を上回る傾向が見られた。

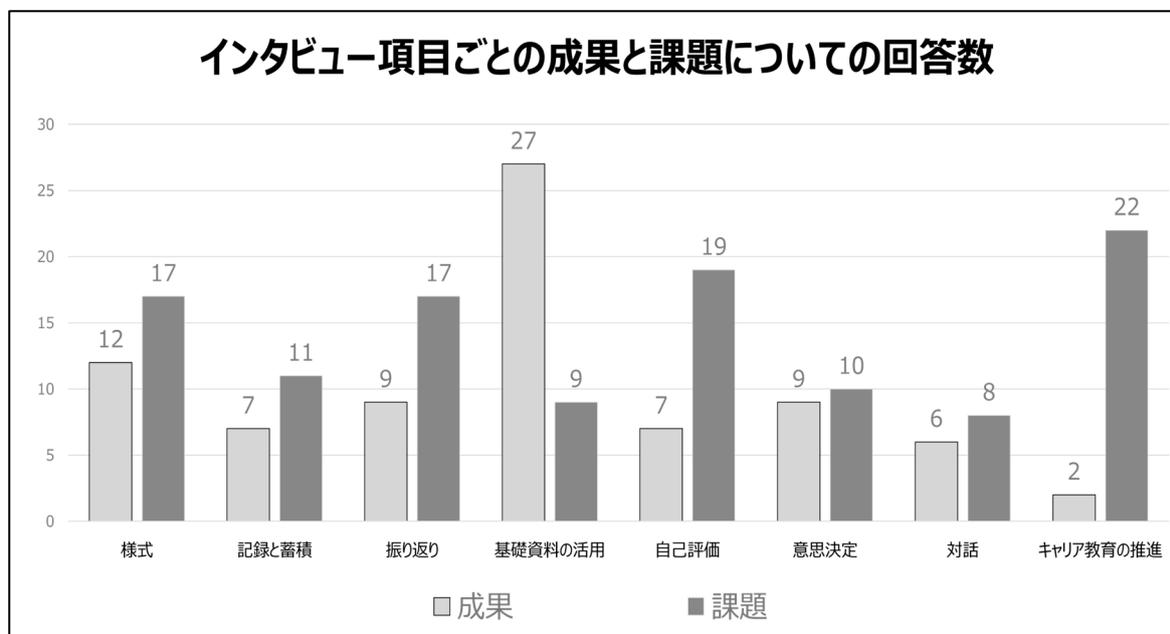


図1 インタビュー項目ごとの成果と課題についての回答数

### （2）各質問項目における学校現場の成果と課題の要点

インタビュー調査で得られた教員の回答をコード化し、各質問項目における学校現場の成果と課題について要点をまとめた。

## 3 考察

調査の結果から、特別支援学校（知的障害）の「キャリア・パスポート」を作成、活用において、次のような工夫点と成果及び課題があると考ええる。

## (1) 工夫点と成果

### 1) 児童生徒の障害特性に応じた教材の工夫と視覚的支援

児童生徒の障害特性や発達段階に応じた支援を行うためには、「キャリア・パスポート」の様式や教材の工夫が有効であると考えられる。具体的には、イラストや写真を活用した視覚的で分かりやすい教材や、質問を絞ったプリントを作成し、実態に合わせて様式を加工するなど、児童生徒が理解しやすい形式を採用する等の工夫が挙げられた。また、学習活動で作成、使用した教材（実習ノートやワークシート、写真、具体物等）を振り返りに活用することで、児童生徒が活動内容を具体的に思い出しやすくする工夫も挙げられた。

### 2) 教員の支援による個別的な指導と記録の促進

「キャリア・パスポート」の作成・活用の場面では、教員が児童生徒と共に取り組み、適切な支援を行うことが有効であると考えられる。具体的には、児童生徒が学習状況の記録を進めやすくするために写真や選択肢を提示したり、補助発問を通じて児童生徒の発言や反応をまとめたりすることが挙げられた。また、文字の読み書きが困難な児童生徒には、ふりがなや補助的な説明を加える支援が行われていた。これらの個別的な支援により、児童生徒が自分自身の活動や成長を記録する学習プロセスがスムーズに進められ、充実した「キャリア・パスポート」の活用につなげることができるのではないかと考える。

### 3) 継続的な記録の蓄積と自己評価・意思決定の支援

「キャリア・パスポート」を通じた学習活動や成果の継続的な記録と振り返りは、児童生徒が成長を実感し、自己評価や意思決定の能力を養う上で有効であると考えられる。具体的には、過去の記録の蓄積を振り返る仕組みを取り入れることで、児童生徒が自らの変化や学習の積み重ねを具体的に捉えることができるような工夫が行われていた。また、児童生徒の特性や興味関心を考慮し、肯定的なフィードバックや補助的な質問を通じて、自己評価や意思決定の支援が行われていた。さらに、児童生徒の好きなことや得意なことを軸に目標を設定する指導が、将来を前向きに考えられるような環境づくりに寄与していることも示唆された。

## (2) 課題

### 1) キャリア教育の目的と培いたい資質、能力、態度の捉え方

キャリア教育は教育活動全体において実施されるべきものであり、青森県が示す「培いたい資質、能力、態度」を基盤として、各学校において作成されたキャリア教育全体計画に則り、児童生徒の資質や能力の育成が進められることが求められている。しかしながら、これらの力を、具体的にどのような学習活動で育てていくのかについての理解には、教員間でばらつきがあると考えられる。特に、受検や実習といったような学習活動のみがキャリア教育として捉えられ、それ以外の学習活動がキャリア教育の観点で適切に実施されていない可能性がある。

このような課題は、「キャリア・パスポート」の作成過程において影響を与える可能性がある。具体的には、振り返りの対象となる学習活動が限定されることや、設定した目標と学習活動を結びつける際に困難を感じる場面が生じることが考えられる。したがって、キャリア教育の目

的を達成するためには、教育活動全体におけるキャリア教育の位置付けを再考し、教員間での共通理解を深めることが不可欠であると考える。

## 2) 知的障害のある児童生徒の特性に応じた「キャリア・パスポート」の様式の工夫

青森県教育委員会は、「キャリア・パスポート」について、「各地域・学校の児童生徒の実態に合わせてカスタマイズする等、工夫して活用することができる」としている。研究対象校では、青森県教育委員会が例示した「キャリア・パスポート」の様式をもとに、児童生徒の学年や実態に応じて内容を下学年向けに簡略化したり、一部変更を加えたりするなど、様式を工夫して取り組んでいる。しかしながら、「キャリア・パスポート」の様式のカスタマイズに関しては、教員の間でいくつかの課題が認識されていると考えられる。具体的には、内容や枚数をどの程度までカスタマイズすべきか、また、カスタマイズが児童生徒の実態に適しているかどうかについての判断が難しいという声が挙げられている。また、学習活動の中で作成・活用した基礎資料を活用して「キャリア・パスポート」を指導した際に手応えを感じている教員が多い一方で、「A4判5枚以内」という枚数制限が、実際の指導や活用の妨げとなる場合もあるという指摘がある。

このような状況から、多くの教員が「キャリア・パスポート」の作成や活用を「作りにくく」「活用しにくい」と感じている現状が予想される。したがって、「キャリア・パスポート」の効果的な活用を促進するためには、教員がカスタマイズを行う際の具体的な指針を示すとともに、現場の声を反映した柔軟な運用のあり方を検討することが重要である。

## 3) 知的障害の特性による「キャリア・パスポート」作成、活用の各学習プロセスにおける学習の困難さ

知的障害のある児童生徒が「キャリア・パスポート」を作成、活用する際には、各学習プロセスにおいて障害特性による困難さが生じることが考えられる。具体的には、記録の際の読み書き能力や振り返りの際の記憶力、自己評価の際のメタ認知や意思決定の際の判断力といった、各場面で必要とされる能力に課題がある場合が多い。このような課題に対応するためには、「キャリア・パスポート」の指導において、児童生徒一人一人の特性に応じた支援の工夫が求められる。

しかしながら、その支援方法については、教員間での実践や工夫に差があることが考えられる。さらに、これらの支援方法や実践例が学校全体で十分に共有されていない状況も考えられる。その結果、教員の力量や経験によって指導の質にばらつきが生じている可能性がある。

### (3) 研修会資料の提案

こうした課題に対応するためには、実際に成果を感じている教員の取組や工夫を共有する仕組みが必要である。このような情報共有が実現すれば、教員全体が自信をもって「キャリア・パスポート」の指導に取り組むことができ、自己評価や意思決定を促す指導を通して、児童生徒の変容を実感することができる考えた。

そこで本調査の結果を踏まえ、「キャリア・パスポート」の作成・活用に関する研修会の資料を作成した。資料の作成にあたっては、調査結果から抽出された課題を中心に構成を行った。インタビュー調査の課題の一つとして挙げられた「「キャリア・パスポート」の様式や蓄積する枚数に関する課題」については、学校全体の運用方針や枠組みを見直す必要があることから、令和6年度段階での介入は行わず、研究成果が明確になるまで慎重に行うと判断した。そのため、この課題は研修資料の中心的なテーマからは除外し、他の具体的な課題を取り上げて構成した。具体的には、「キャリア教育の目的と培いたい資質、能力、態度の捉え方」や「知的障害のある児童生徒一人一人の特性に応じた支援の工夫」といった教員が直面する具体的な課題に焦点を当てた。また、インタビュー調査の中で報告された成功事例や実践的な工夫を共有し、課題解決のための実践的な指針を提供する内容とした。

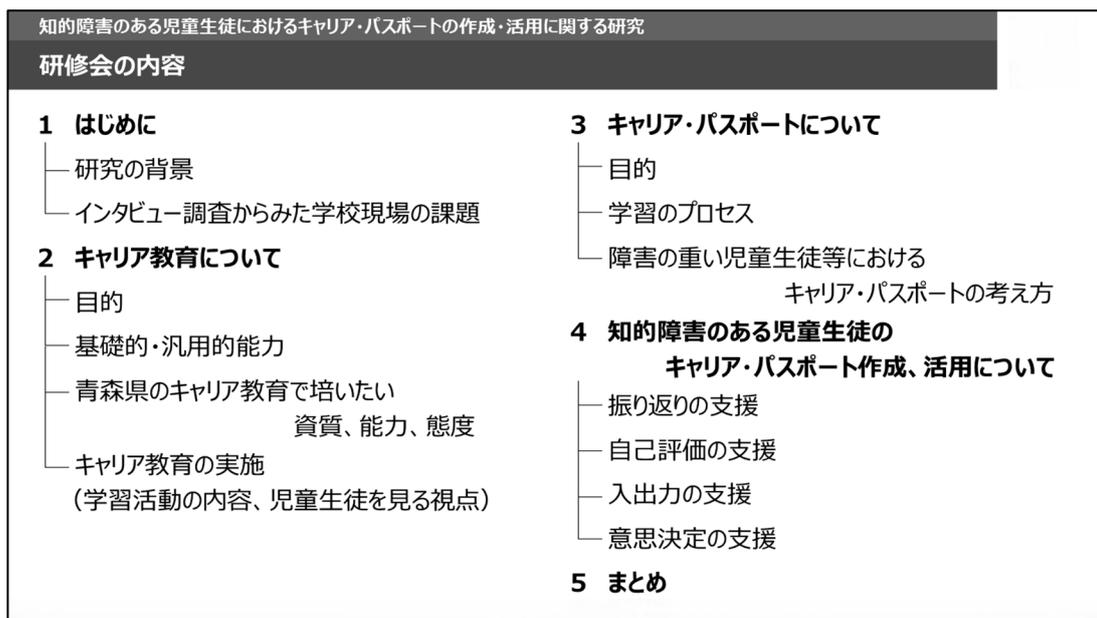


図2 研修会の内容

### 第3節 【研究②】教員を対象とした研修会と教員の変化を分析するための質問紙調査

#### 1 研究の目的

【研究①】のインタビュー調査の結果をもとに、教員が課題を感じている点を明確にした上で整理し、教員を対象とした研修会用資料を作成する。そして、この資料をもとに研修会を実施する。さらに、研修会の効果を測定するために、教員を対象とした質問紙調査を実施する。調査は、研修会の前後で比較検討するため同じ質問紙を使用し、研修会実施前の2024年9月と、実施後にあたる2025年2月の2回にわたり実施する。

#### 2 研修会の方法

- (1) 実施日：(1回目) 令和6年9月30日(月)、(2回目) 令和6年10月2日(水)
- (2) 対象：(1回目) 青森県立八戸第二養護学校の教職員、  
(2回目) 青森県立八戸高等支援学校の教職員
- (3) 実施方法：対面(60分)

### 3 質問紙調査の方法

- (1) 実施日：(1回目) 令和6年9月9日(月)～令和6年9月27日(金)、  
(2回目) 令和7年1月28日(火)～令和7年2月14日(金)
- (2) 内容：①プロフィール、②「キャリア・パスポート」について
- (3) 実施方法：Microsoft Formsによるオンラインアンケート(20分)
- (4) 分析方法：ノンパラメトリック検定(Wilcoxonの符号付順位和検定)を用い、研修会の実施により、教員が「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導で、児童生徒の変容を実感できるようになるかを検証する。

知的障害のある児童生徒におけるキャリア・パスポートの作成・活用に関する研究	
質問紙調査の項目	
<b>1 プロフィール</b>	
— 教員の情報	
— 回答する児童生徒の情報	
— 使用しているキャリア・パスポートの様式	
<b>2 キャリア・パスポートについて</b>	
— 記録の入出力を促す支援の工夫	
— 自己評価を促す支援の工夫	
— 自己評価について、指導の手応え(5件法)	
— 意思決定を促す支援の工夫	
— 意思決定について、指導の手応え(5件法)	
— 対話を促す支援の工夫	

図3 質問紙調査の項目

### 4 結果と考察

回収率52.1% (86名/165名)

#### (1) プロフィール

##### 1) 教員の情報

表1 在籍校

在籍校	n = 86
青森県立八戸第二養護学校	55 (64%)
青森県立八戸高等支援学校	31 (36%)

表2 職名

職名	n = 86
教諭	64 (74%)
臨時講師	22 (26%)

表3 所属学部

所属学部	n = 86
小学部	33 (38%)
中学部	22 (26%)
高等部	31 (36%)

表4 教職経験年数

教職経験年数	n = 86
10年以下	32 (37%)
10年以上 ～ 20年未満	28 (33%)
20年以上 ～ 30年未満	17 (20%)
30年以上 ～ 40年未満	8 (9%)
40年以上	1 (1%)

表5 研修に参加した経験

キャリア教育、「キャリア・パスポート」に関する研修に参加した経験	n = 86
ある	29 (34%)
ない	57 (66%)

## 2) 回答する教員が指導する児童生徒の情報

表6 障害種別学級

障害種別学級	n = 86
単一障害学級	27 (31%)
重複障害学級	59 (69%)

表7 愛護手帳（療育手帳）の所持状況

愛護手帳（療育手帳）	n = 86
愛護手帳A（重度）	35 (41%)
愛護手帳B（それ以外）	49 (57%)
未所持	2 (3%)

表8 その他の障害者手帳の所持状況

その他の障害者手帳	n = 86
身体障害者手帳	9 (11%)
精神障害者保健福祉手帳	5 (6%)
未所持	72 (83%)

3) 使用している「キャリア・パスポート」の様式

表9 使用している「キャリア・パスポート」の様式

使用している「キャリア・パスポート」の様式	n = 86
自治体から例示された様式の中から、児童生徒の学年に即したものを使用している。	20 (23%)
自治体から例示された様式の中から、児童生徒の実態に合わせて適した学年を選んで使用している。	26 (30%)
児童生徒の実態に合わせて、学校、学部、学年等で独自に検討した様式を使用している。	39 (46%)
個別の教育支援計画または個別の指導計画等で代用している。	1 (1%)

(2) 「キャリア・パスポート」について

1) 自己評価について、指導の手応え

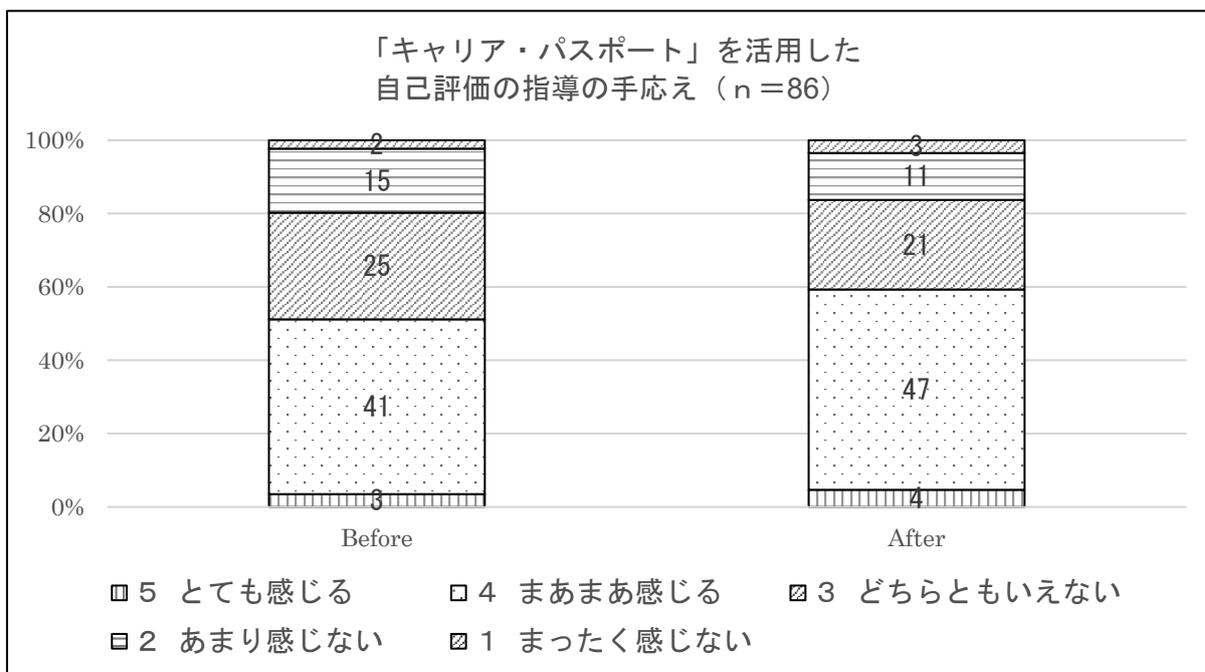


図4 「キャリア・パスポート」を活用した自己評価の指導の手応え

2) 意思決定について、指導の手応え

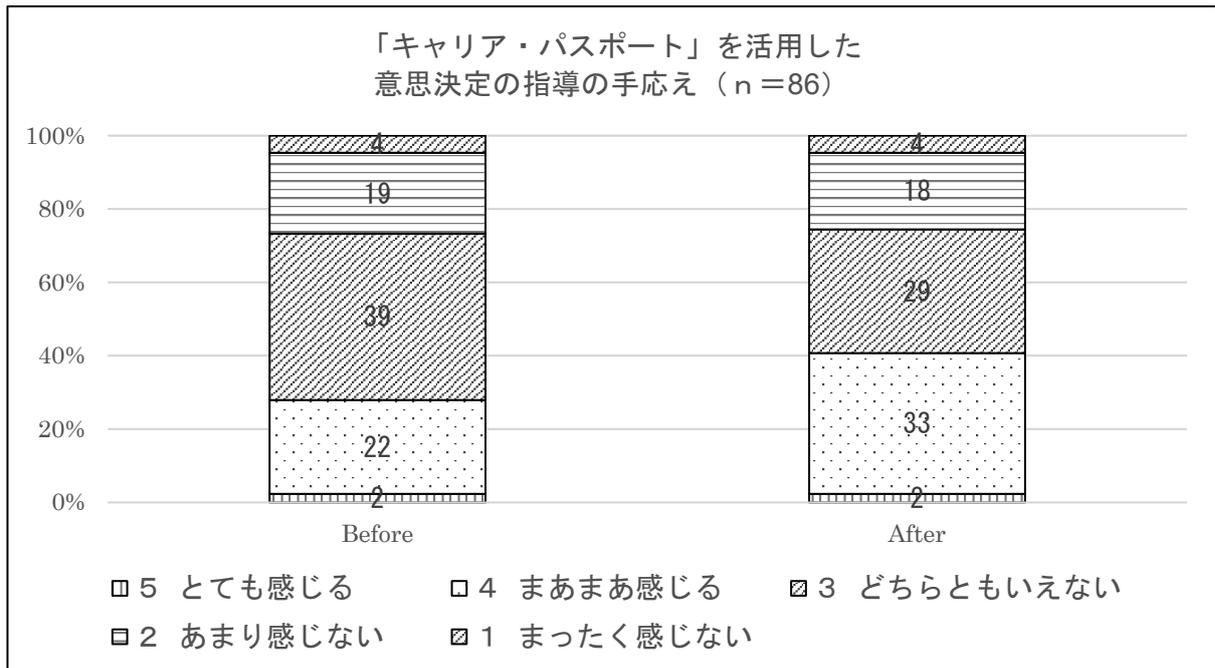


図5 「キャリア・パスポート」を活用した意思決定の指導の手応え

(3) ノンパラメトリック検定 (Wilcoxonの符号付順位和検定) による分析

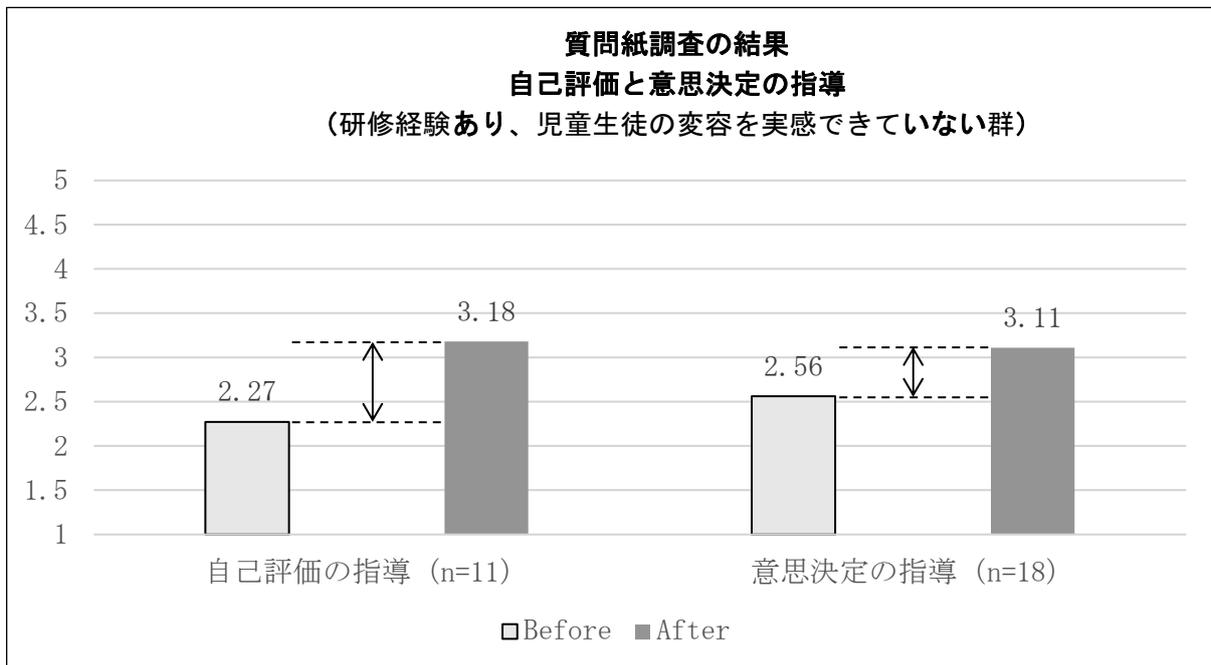


図6 ノンパラメトリック検定による分析結果①

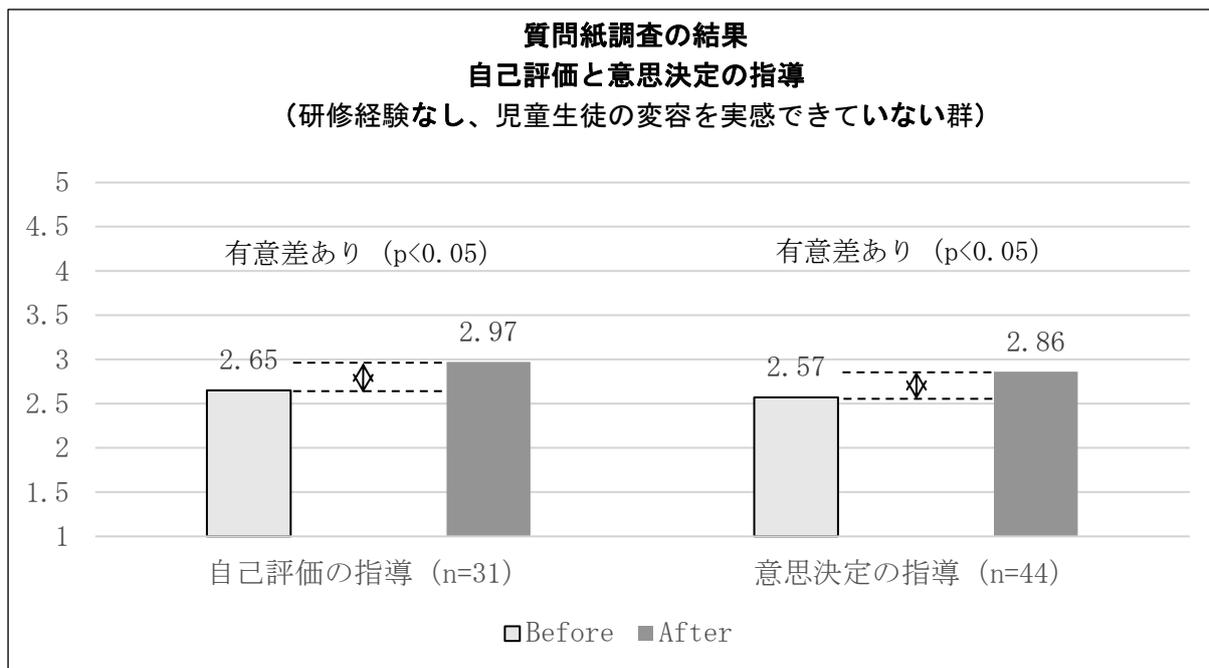


図7 ノンパラメトリック検定による分析結果②

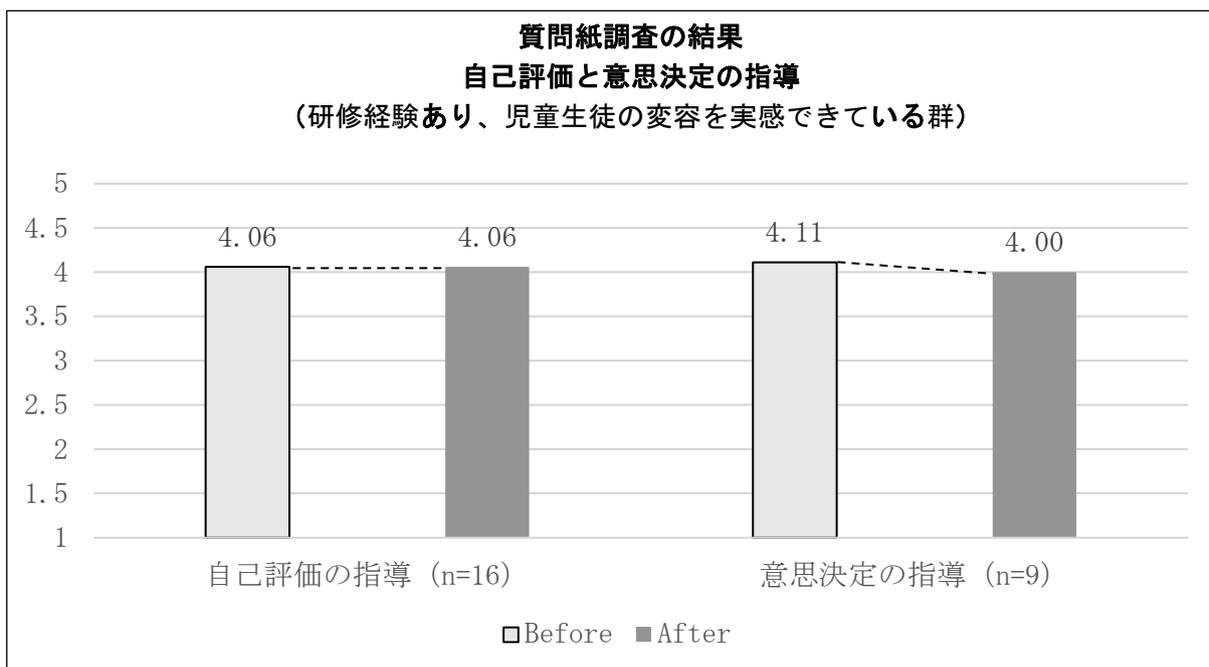


図8 ノンパラメトリック検定による分析結果③

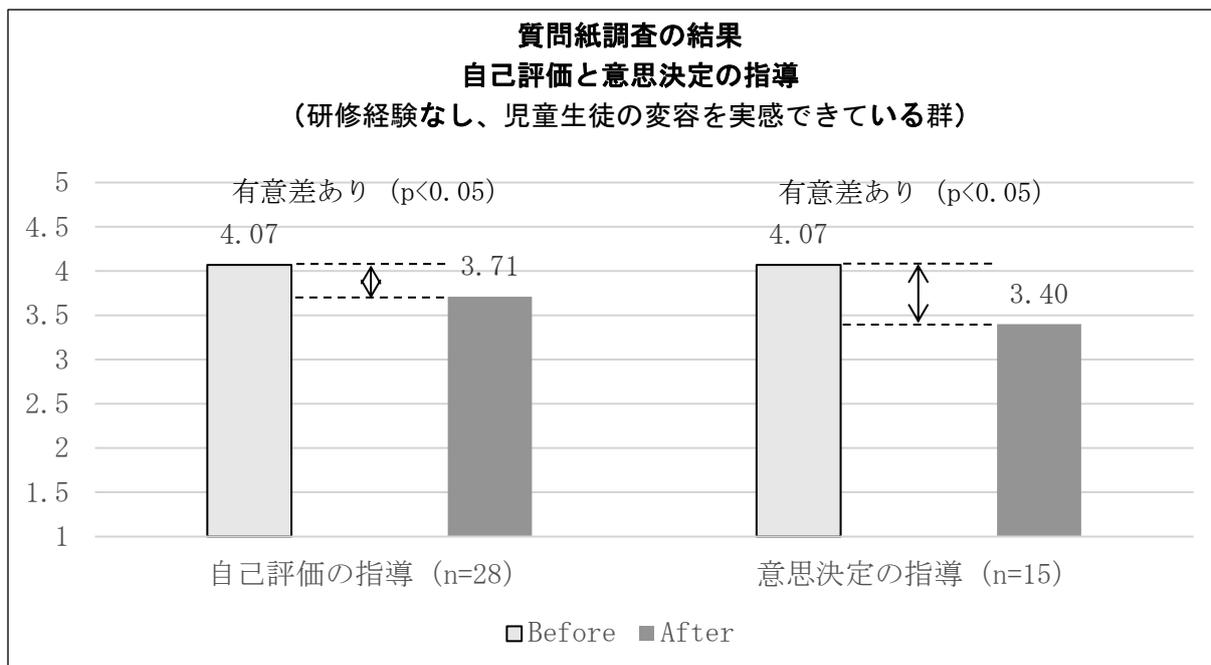


図9 ノンパラメトリック検定による分析結果④

#### (4) 考察

本研究では、研修会の効果を分析するため、研修会の前後で同じ質問紙調査を2回実施し、ノンパラメトリック検定を用いて、教員が「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導で、児童生徒の変容を実感できるようになるかを明らかにした。

分析にあたって、教員の変化は、過去の研修経験の有無と、1回目の調査でどの程度児童生徒の変容を感じていたかで異なるのではないかと考え、研修経験の有無と1回目の回答の高低をクロス分析を行った。

##### 1) 研修経験あり×1回目の質問紙調査で児童生徒の変容を実感できていなかった群

研修後に最も有意に数値が向上した。

研修によってキャリア教育の本質的な理解が進み、個に応じた指導を実践することで児童生徒の変容を実感できるようになったことが推察される。また、研修経験があったことで、より研修会の内容について理解が進んだのではないかと考える。

##### 2) 研修経験なし×1回目の質問紙調査で児童生徒の変容を実感できていなかった群

研修後に有意に数値が向上した。

研修によってキャリア教育の本質的な理解が進み、個に応じた指導を実践することで児童生徒の変容を実感できるようになったことが推察される。

##### 3) 研修経験あり×1回目の質問紙調査で児童生徒の変容を実感できていた群

研修後に有意な数値の変化はなかった。

研修経験があり、かつ児童生徒の変容を実感できている状況で、研修の内容と自身の理解が一致していたため、高い水準のまま指導が継続され、大きな数値の変化がなかったことが推察される。

#### 4) 研修経験なし×1回目の質問紙調査で児童生徒の変容を実感できていた群

研修後に有意に数値が低下した。

研修によってキャリア教育や個に応じた指導について理解が深まり、自身の状況を見直したときに、自己評価や意思決定の指導が十分適切ではないと感じ、数値が下がったことが推察される。

### 第4節 まとめ

本研究では、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導について、教員が感じている成果と課題を明らかにするとともに、課題に対応した研修会を実施し、その効果を検証した。具体的には、インタビュー調査により学校現場における実践の成果と課題を整理した上で研修会を実施し、研修会の前後で同一内容の質問紙調査を行い、研修会が教員の意識や実感に与える影響を分析した。

その結果、課題に対応した研修会の実施は、教員が「キャリア・パスポート」を活用した自己評価や意思決定の指導において、児童生徒の変容を実感できるようになることに一定程度寄与していることが示唆された。特に、研修前の段階で児童生徒の変容を実感できていなかった教員群においては、研修後に数値の向上が認められ、研修を通してキャリア教育の目的や指導の視点について理解が深まり、日常の実践を振り返る契機となった可能性が考えられる。加えて、研修経験の有無による比較においても、研修経験がある群の方が数値の上昇が大きい傾向が認められたことから、研修を継続的に実施することの有効性が示唆される。以上より、課題に対応した研修会は、教員の指導観や実践を見直す上で一定の効果を有するものと推察される。

一方で、研修後においても、児童生徒の変容を実感できていないと回答した教員の割合は、自己評価の指導において約5割、意思決定の指導において約7割を占めており、教員全体で見ると、過半数以上の教員が児童生徒の変容を十分に実感できていない状況が明らかとなった。すなわち、研修会は一定の効果を示したものの、単発的な研修のみでは、すべての教員が「キャリア・パスポート」を活用した指導を通して児童生徒の変容を安定的に捉えられる段階にまで到達するには至っていないことが課題として挙げられる。

また、本研究では教員研修を中心とした介入を行った一方で、インタビュー調査において課題として挙げられた「キャリア・パスポート」の様式や記載内容、蓄積の在り方については、学校全体の運用方針や枠組みに関わる事項であることから、令和6年度の段階では具体的な介入を行っていない。この点は、研修によって教員の理解や意識に一定の変化が見られたとしても、それが日常的な実践として定着し、児童生徒の変容を実感しやすい指導へと結び付くための条件が十分に整っていない可能性を示すものである。

以上のことから、特別支援学校（知的障害）において「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導を一層充実させていくためには、研修を単発的な取組として位置付けるのではなく、教員が継続的に学び、実践を振り返ることができる研修機会を計画的に確保していくことが必要である。併せて、令和6年度の研究では十分に介入することができなかった「キャリア・パスポート」の様式や運用の在り方について、知的障害のある児童生徒の実態に即した

形で見直し、学校全体で共有・改善していくことが重要である。これらの取組を次年度の実践研究として位置付け、研修の継続と様式の検討・改善を並行して進めることにより、研修の効果が指導場面における見取りや記録の改善と結び付きやすくなり、「キャリア・パスポート」を中核とした指導が学校全体に浸透していくことが期待される。

### 第3章 「キャリア・パスポート」の様式改善と活用に関する実践研究

#### 第1節 研究の目的と方法

##### 1 研究の目的

本研究の目的は、第2章の研究において明らかになった成果と課題を踏まえ、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導を一層充実させるために、研修会の継続実施と「キャリア・パスポート」の様式・運用の検討及び改善を並行して行い、改善した様式に対する教員の捉え方や評価を整理・検証することである。

第2章の研究では、教員が「キャリア・パスポート」を活用した自己評価および意思決定の指導において抱える課題を整理し、それに対応した研修会を実施した。その結果、課題に対応した研修会の実施は、教員が当該指導において児童生徒の変容を実感できるようになることに一定程度寄与している可能性が示唆された。また、研修経験の有無による比較において、研修経験がある教員群の方が数値の上昇が大きい傾向が認められたことから、研修を継続的に実施することの有効性が示唆された。

一方で、研修後においても、児童生徒の変容を十分に実感できないと回答した教員の割合は、自己評価の指導において約5割、意思決定の指導において約7割を占めた。すなわち、研修会は一定の効果を示したものの、研修の実施のみをもって、教員全体が児童生徒の変容を安定して捉えられる段階に達したとまでは言い難い。したがって、自己評価および意思決定の指導を一層充実させていくためには、研修を継続的に位置付けることに加え、研修以外の側面からの支援方策についても検討する必要があると考えられる。

また、第2章では、インタビュー調査で課題として挙げられた「キャリア・パスポート」の様式や記載内容、蓄積の在り方について、学校全体の運用方針や枠組みに関わる事項であることから、令和6年度の段階では具体的な介入を行っていない。知的障害のある児童生徒においては、経験の想起や表現に困難が生じやすく、自己評価や意思決定を文章等で記述することが負担となる場合も想定される。こうした実態を踏まえると、教員の理解を深める研修の継続のみでは十分とは言えず、児童生徒の実態に即して作成・活用しやすく、かつ指導上の手掛かりを得やすい「キャリア・パスポート」の様式・運用の在り方を併せて検討することが必要であると考えられる。

そこで本研究では、第一に、教員が継続的に学び、実践を振り返ることができる研修会を計画的に実施し、研修会後の教員の捉え方や気付きの変化を整理する。第二に、教員の意見や実践上の課題を踏まえて「キャリア・パスポート」の様式及び運用の在り方を検討し、知的障害のある児童生徒の実態に即した形で作成・活用しやすい様式を具体化する。

以上の取組を、研修の継続と様式改善を相補的に位置付けて並行して進めることにより、教員が自己評価および意思決定の指導において児童生徒の変容を捉えやすくなること、ならびに「キャリア・パスポート」の作成・活用が学校全体で共有され、継続的な記録の蓄積と活用に結び付くことが期待される。本研究では、これらの成果を、改善した様式に対する教員の捉え方や評価の整理を通して検証し、特別支援学校（知的障害）におけるキャリア教育の質的向上に資する実践的知見を得ることを目指す。

## 2 研究の方法

本研究では、青森県立八戸第二養護学校における実践を対象とし、教員研修及び「キャリア・パスポート」の様式検討に関する取組を通して、学校内での実践の過程を整理・検証する実践研究とする。研究の方法として、以下の二つの取組を行う。

### （１）キャリア教育に関する研修会の実施

校内の教員を対象としてキャリア教育に関する研修会を実施し、研修会終了後に教員から感想や意見を収集する。収集した感想や意見については内容を整理・集約し、教員が研修を通してどのような点に気づき、どのような視点を得たのかを把握するとともに、今後の研修内容の検討や、「キャリア・パスポート」の様式検討に向けた基礎資料とする。

### （２）「キャリア・パスポート」の様式検討及び様式改善の実施

希望者を対象として「キャリア・パスポート」の様式検討会を実施し、現行の様式の活用に関して教員が感じている課題及び改善の視点を整理する。その上で、整理された課題を踏まえ、筆者及び校内の関係者により、知的障害のある児童生徒の実態に即した様式となるよう検討を行い、新たな様式を作成する。作成した様式は校内に周知し、その後、教員を対象とした質問紙調査を実施する。質問紙調査では、従来の様式との比較を通して、自己評価、意思決定、記録の蓄積等に関する教員の捉え方について検証する。

## 第２節 キャリア教育に関する研修会

本節では、（上記２）研究の方法に基づき実施したキャリア教育に関する研修会について、概要及び研修会後の教員の感想・意見を整理する。

### 1 研修会の概要

- （１）実施日：令和7年8月26日（火）
- （２）対象：青森県立八戸第二養護学校の教職員
- （３）実施方法：対面（60分）
- （４）内容：①キャリア教育とは  
②キャリア教育で培いたい資質、能力、態度  
③どのような場面でキャリア教育を行っていくのか  
④キャリア・パスポートの概要

## 2 研修会後の教員の感想

研修会後に回収した教員の感想・意見を整理した結果、内容は主に以下の四つの観点に分類された。

### (1) キャリア教育に対する理解の深化

研修会を通して、キャリア教育の考え方や位置付けについて理解が深まったとする記述が多く見られた。「キャリア教育について整理する機会となった」「これまで行ってきた実践をキャリア発達の視点で捉え直すことができた」といった意見があり、教員がキャリア教育を体系的に理解し直す契機となったことがうかがえた。

### (2) 日常の指導実践に対する意識の変化

日常の授業や指導の在り方を見直そうとする意識の変化に関する記述が見られた。「この学習が将来にどのようにつながっているのかを、児童生徒に分かるように伝えたい」「日々の指導をキャリアの視点をもって行っていきたい」といった意見があり、教員が自身の実践を振り返り、指導の在り方を改善しようとする姿勢が示された。

### (3) 「キャリア・パスポート」の活用に関する課題意識

一方で、「キャリア・パスポート」の活用に関しては、課題を指摘する意見も多く見られた。「記入する時期や方法が分かりにくい」「欄を埋めることが目的になっているように感じる」「児童生徒の実態と様式が合っていないと感じる」といった記述から、現行の様式や運用が、教員にとって必ずしも扱いやすいものとはなっていない実態が明らかとなった。

### (4) 学校組織としての体制や共通理解に関する意見

キャリア教育を学校全体で進めていく上での体制や共通理解の必要性に関する意見も見られた。具体的には、「キャリア・パスポート」の扱い方や活用の位置付けについて、管理職からの明確な周知を求める記述があった。また、家庭との連携の在り方について言及する意見も見られ、保護者に対して「キャリア・パスポート」の目的や活用方法をどのように説明し、共有していくかが重要であることが示された。これらの意見から、キャリア教育を個々の教員の取組にとどめるのではなく、学校としての方針を明確にし、組織的に推進していく必要性がうかがえた。

これらの感想・意見から、本研修会は、教員のキャリア教育に対する理解や指導観を見直す契機となるとともに、「キャリア・パスポート」の様式や運用、学校体制に関する課題を明確にする機会となったことが示された。

## 第3節 「キャリア・パスポート」の様式検討に関する取組

前節では、キャリア教育に関する研修会後の教員の感想・意見を整理した。その結果、教員のキャリア教育に対する理解や指導実践に対する意識の変化が見られた一方で、「キャリア・パスポート」の活用に関しては、様式や運用の在り方に関する課題が多く挙げられた。また、管理職か

らの周知の在り方や家庭との連携を含め、学校全体としての方針を明確にする必要性も示された。これらの結果を踏まえ、本節では、「キャリア・パスポート」の様式改善を目的とした検討の取組について扱う。具体的には、希望者を対象とした様式検討会の実施を通して、教員から挙げられた課題を整理するとともに、それらの課題を踏まえて行った様式改善の過程について整理する。

## 1 様式検討会の実施と課題の整理

前節で整理した研修会後の教員の感想・意見を踏まえ、「キャリア・パスポート」の様式改善に向けた具体的な検討を行うため、教員を対象とした様式検討会を実施した。

### (1) 様式検討会の概要

様式検討会は、令和7年10月27日に本校において実施し、希望者19名の教員が参加した。検討会では、現行の「キャリア・パスポート」の様式をもとに、知的障害のある児童生徒の実態に照らして、作成や活用の際に生じている困難や課題について意見交換を行った。また、課題の整理にとどまらず、改善に向けた具体的な視点やアイデアについても共有した。

### (2) 様式検討会の結果

様式検討会における協議内容を整理した結果、「キャリア・パスポート」の様式や運用に関して、主に以下の観点が整理された。

#### 1) 児童生徒の実態に即した振り返りの在り方

児童生徒が自身の気持ちや考えを言語化できることを前提とした項目が多いことから、表出が難しい実態の児童生徒にとって取り組み方に工夫を要する場面があることが共有された。特に、文章による記述を中心とした構成では、学習活動や行事での経験を十分に振り返ることが難しく、教員が補助的にまとめる場面が多いことが指摘された。これらを踏まえ、写真や具体物、学習活動で使用した教材等をもとに振り返ることができる構成とする必要性が整理された。

#### 2) 振り返り項目の内容と記録方法に関する視点

項目の内容が抽象的であることや、振り返りの量が多いことから、児童生徒にとって「何について」「どのように」振り返ればよいのかが分かりにくい場面があることが挙げられた。また、記入欄が限られていることや文章中心の構成であることが、記録のしにくさにつながっているとの意見も見られた。これらの意見を踏まえ、振り返りの観点を絞ること、選択式の評価や簡潔な表現を取り入れることなど、実態に応じて取り組みやすい記録方法とする方向性が整理された。

#### 3) 作成時期や活用場面の明確化に関する視点

「キャリア・パスポート」を作成する時期や場面が明確でないため、学習活動や行事と結び付いた振り返りが行われにくい場合があることが挙げられた。その結果、一定期間が経過してからまとめて記入することになり、児童生徒の経験や気持ちを十分に反映できないことがある

との意見が見られた。これらを踏まえ、学習活動や行事の直後に振り返ることができるよう、作成時期をあらかじめ設定する必要性が整理された。

#### 4) 家庭との連携及び学校全体での共通理解に関する視点

家庭との役割分担や情報共有の在り方について意見が出され、学校生活だけでは把握しにくい児童生徒の様子について、家庭からの情報をどのように位置付けるかが重要であることが確認された。また、「キャリア・パスポート」の扱い方や活用の位置付けについて、管理職からの方針の提示を求める意見も見られ、学校全体で共通理解を図りながら進めていく必要性が整理された。

以上のように、様式検討会では、児童生徒の実態に即した振り返りの在り方、記録方法、作成時期、家庭との連携及び学校体制に関する観点が整理された。これらの観点を踏まえ、次項では「キャリア・パスポート」の様式改善に向けた取組について述べる。

## 2 課題を踏まえた様式改善の取組

前項で整理した様式検討会の結果を踏まえ、知的障害のある児童生徒の実態や学校現場における指導の実際に即した「キャリア・パスポート」の様式改善に取り組んだ。本項では、検討会で整理された観点と対応させながら、様式改善の具体的な内容について整理する。

### (1) 児童生徒の実態に即した振り返りが可能となる構成への改善

児童生徒が自身の気持ちや考えを言語化できることを前提とした構成では、表出が難しい実態の児童生徒にとって取り組みにくい場面があることが共有されたことを踏まえ、文章による記述を中心とした構成を見直し、写真や具体物、学習活動で使用した教材等をもとに振り返ることができる様式へと改善した。具体的には、学習活動や行事、校内実習等の場面ごとに写真を貼付する欄を設け、視覚的に活動を振り返ることができる構成とした。これにより、言語による表出が難しい児童生徒であっても、経験をもとに振り返りに取り組みやすくなることを意図した。

### (2) 振り返り項目の精選と記録方法の工夫

振り返り項目の内容が抽象的であることや、記録の量が多いことにより、児童生徒にとって振り返りが行いにくいという課題が整理されたことを受け、項目の精選と記録方法の工夫を行った。具体的には、「がんばったこと」「楽しかったこと」「むずかしかったこと」など、具体的な経験に基づいて振り返ることができる項目を設定するとともに、選択式の評価や簡潔な表現を取り入れた。これにより、児童生徒の実態に応じて、無理なく記録に取り組むことができる様式となるよう配慮した。

### (3) 作成時期や活用場面を明確にした様式構成への改善

「キャリア・パスポート」を作成する時期や場面が明確でないことから、学習活動や行事と十分に結び付いた振り返りが行われにくいという課題が挙げられていたことを踏まえ、様式の作成

時期をあらかじめ設定し、年度始め、校内実習、学習活動や行事の終了後、年度末といった節目ごとに作成できる構成とした。これにより、活動直後に振り返りを行い、児童生徒の経験や気持ちを即時的に記録するとともに、継続的な振り返りにつなげることを意図した。

#### （４）家庭との連携及び学校全体での活用を意識した様式への改善

家庭との役割分担や情報共有の在り方、学校全体での共通理解に関する課題を踏まえ、家庭からのコメントを記入できる欄を設けるなど、学校と家庭が児童生徒の成長を共有できる様式構成とした。また、様式の構成や作成時期を明確にすることで、教員間での共通理解を図りやすくし、学校全体で「キャリア・パスポート」を活用できるよう配慮した。これにより、個々の教員の工夫に依存するのではなく、組織的な取組として運用していくことを目指した。

以上のように、様式検討会で整理された観点を踏まえ、「キャリア・パスポート」の様式改善を行った。次に、これらの改善の視点を反映して作成した新たな「キャリア・パスポート」の様式を示すとともに、第４節では、当該様式に対する教員の捉え方について質問紙調査の結果をもとに整理する。

### おん □1年の はじめり！ (学種開き・歓迎会)

令和 年 月 日 ( )  
年 組 名前

1 どんなことをして遊ぶのが好きですか？

2 得意なことはなんですか？      3 苦手なことはなんですか？

4 今年、学校で楽しみなことはなんですか？

5 学級では、どんな係活動をごんばりますか？

6 今年の目標を立ててみましょう！

**がんばろう！**

### こうせいじっしゅう ぜんき □校内実習 (前期)

令和 年 月 日 ( )  
年 組 名前

校内実習の期間 月 日 ( ) から 月 日 ( ) まで  
作業班

1 校内実習の目標を立てて、実習が終わったら振り返りましょう！

	目標を立てよう	振り返り
目標1		
目標2		
目標3		

振り返り : ◎うまくできた    ○まあまあできた    △むずかしかった

2 校内実習では、どんな仕事をがんばりましたか？

先生から

3 次はどんな仕事にチャレンジしてみたいですか？

---

4 どのくらい実習をごんばれたか、振り返ってみましょう！  
◎うまくできた    ○まあまあできた    △むずかしかった

項目	評価
いつでも元気な挨拶をすることができましたか？	◎・○・△
先生の顔を見て話を聞くことができましたか？	◎・○・△
丁寧な言葉（～です、～ます。）でお話できましたか？	◎・○・△
困ったら、相談することができましたか？	◎・○・△
作業が終わったら、報告することができましたか？	◎・○・△
落ち着いて作業することができましたか？	◎・○・△
自分の仕事を最後までやりとることができましたか？	◎・○・△
作業の準備や後片付けができましたか？	◎・○・△
服装や身だしなみを整えることができましたか？	◎・○・△
安全に気を付けて作業することができましたか？	◎・○・△
時間いっぱい仕事を続けることができましたか？	◎・○・△
丁寧に素早く作業することができましたか？	◎・○・△

### ぜんき みる かえ □前期を振り返ろう！

令和 年 月 日 ( )  
年 組 名前

1 前期、楽しかった勉強や思い出はなんですか？

2 前期、がんばったことや気をつけたことはなんですか？

3 前期、難しかったことや苦手だったことはなんですか？

4 後期、楽しみな勉強やがんばりたいことを書いてみましょう！

5 前期、がんばった勉強や楽しかった思い出の写真をはりましょう！

先生からのコメント

おうちの人からのコメント

図 10-1 「キャリア・パスポート」新様式

### こがけくしょう しょうがくりょう しょくはくがくしょう 校外学習、修学旅行、宿泊学習

令和 年 月 日 ( )

年 組 名前

- 1 校外学習の目標を書きましょう！
- 2 校外学習で、楽しかったことや思い出に残っていることはなんですか？
- 3 校外学習で、がんばったことや気をつけたことはなんですか？
- 4 校外学習に行って、好きになった場所やお店がありましたか？
- 5 校外学習に行って、どんなことがわかりましたか？
- 6 校外学習でがんばったことや、楽しかった思い出の写真をはりましょう！

### がくしょうはっぴょうかい 学習発表会

令和 年 月 日 ( )

年 組 名前

- 1 学習発表会の目標を書きましょう！
- 2 学習発表会で、楽しかった勉強や思い出はなんですか？
- 3 学習発表会で、がんばったことや気をつけたことはなんですか？
- 4 学習発表会で、難しかったことや苦手だったことはなんですか？
- 5 次の学習発表会では、どんなことにチャレンジしてみたいですか？
- 6 学習発表会でがんばった勉強や、楽しかった思い出の写真をはりましょう！

---

### ちゅうがくぶ たいかい 中学部スポーツ大会

令和 年 月 日 ( )

年 組 名前

- 1 スポーツ大会の目標を書きましょう！
- 2 スポーツ大会で、楽しかった勉強や思い出はなんですか？
- 3 スポーツ大会で、がんばったことや気をつけたことはなんですか？
- 4 スポーツ大会で、難しかったことや苦手だったことはなんですか？
- 5 次のスポーツ大会では、どんなことにチャレンジしてみたいですか？
- 6 スポーツ大会でがんばった勉強や、楽しかった思い出の写真をはりましょう！

### こうがいじっしゅう こうぎ 校内実習（後期）

令和 年 月 日 ( )

年 組 名前

校内実習の期間 月 日 ( ) から 月 日 ( ) まで

作業班

- 1 校内実習の目標をたてて、実習が終わったら振り返りましょう！  

	目標を立てよう	振り返り
目標1		
目標2		
目標3		

振り返り： ◎うまくできた    ○まあまあできた    △むずかしかった
- 2 校内実習では、どんな仕事をがんばりましたか？  

先生から

.....

.....

.....
- 3 次のどんな仕事にチャレンジしてみたいですか？  

.....

.....

.....

図 10-2 「キャリア・パスポート」新様式

＼4 どのくらい実習をがんばれたか、振り返ってみましょう！  
◎うまくできた ○まあまあできた △むずかしかった

項目	評価
いつでも適切な挨拶をすることができましたか？	◎・○・△
先生の顔を見て話を聞くことができましたか？	◎・○・△
丁寧な言葉（～です。～ます。）でお話できましたか？	◎・○・△
困ったら、相談することができましたか？	◎・○・△
作業が終わったら、報告することができましたか？	◎・○・△
落ちついて作業することができましたか？	◎・○・△
自分の仕事を最後までやりとげることができましたか？	◎・○・△
作業の準備や後片付けができましたか？	◎・○・△
服装や身だしなみを整えることができましたか？	◎・○・△
安全に気を付けて作業することができましたか？	◎・○・△
時間いっぱい仕事を続けることができましたか？	◎・○・△
丁寧に早く作業することができましたか？	◎・○・△

＼1 年を振り返ろう！



令和 年 月 日（ ）

年 組 名前

＼1 今年1年の中で、楽しかった勉強や思い出はなんですか？

＼2 今年1年で、がんばったことや氣をつけたことはなんですか？



＼3 今年1年で、難しかったことや、苦手だったことはなんですか？

＼4 次の学部や学年になったら、楽しみな勉強やがんばりたいことを書いてみましょう！

＼5 今年、がんばった勉強や楽しかった思い出の写真をはりましょう！

うらもやってみよう！



校訓

「健康な体」 「旺盛な意欲」 「生活する技術」 「豊かな心」

このような自分になれるようにがんばろう！

- 「健康な体」 → 進んで体を動かそう！
- 「旺盛な意欲」 → 目標に向かって最後まで取り組もう！
- 「生活する技術」 → 自分のことは自分でやろう！
- 「豊かな心」 → 友達と仲よく、思いやりをもとう！



＼6 今年一年を振り返って、自分がどのくらいがんばれたか、○をつけましょう！

●進んで体を動かすことができましたか？

できなかった    あまりできなかった    すごかったです    まあまあでした    すごくできた

●目標に向かって最後まで取り組むことができましたか？

できなかった    あまりできなかった    すごかったです    まあまあでした    すごくできた

●自分のことは自分でできましたか？

できなかった    あまりできなかった    すごかったです    まあまあでした    すごくできた

●友達と仲よく、思いやりをもって接することができましたか？

できなかった    あまりできなかった    すごかったです    まあまあでした    すごくできた

先生からのコメント

おうちの人からのコメント

図 10-3 「キャリア・パスポート」新様式

## 第4節 令和7年度実践のまとめ

### 1 質問紙調査の結果

#### (1) 質問紙調査の方法

- 1) 実施日：令和8年1月14日（水）～令和8年1月21日（水）
- 2) 内容：「キャリア・パスポート」様式改善について
- 3) 実施方法：Google Formsによるオンラインアンケート（10分）

#### (2) 質問紙調査の結果

回収率94.9%（93名／98名）

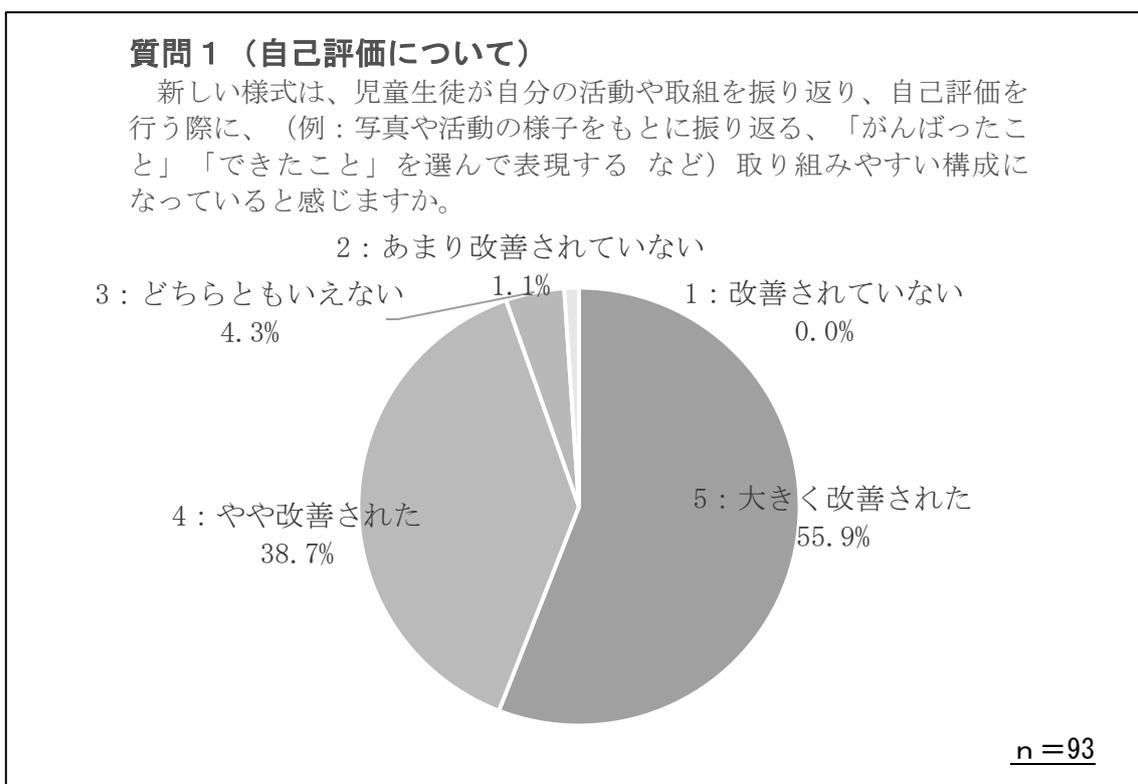
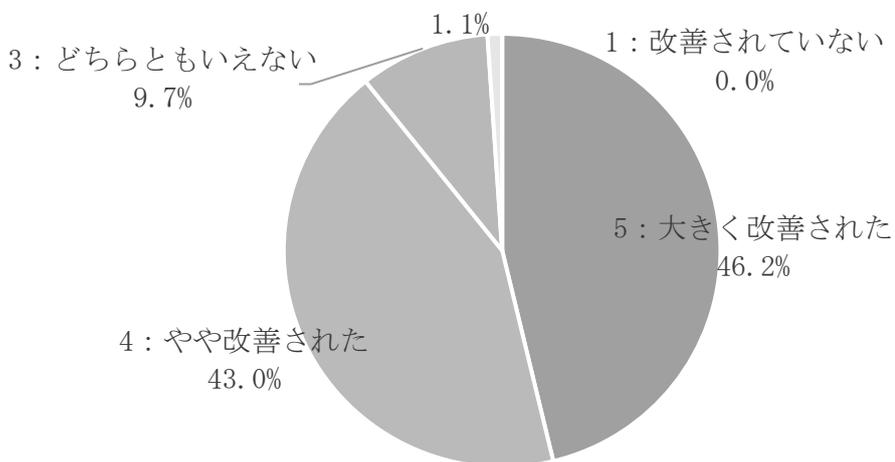


図 11-1 質問紙調査の結果（質問1）

### 質問2（意思決定について）

新しい様式は、児童生徒が次に取り組みたいことや、がんばりたいことを考えるなど、意思決定につながる振り返りを行う際に、（例：次の学習や活動の目標を考える、「次はこうしたい」と選択する など）行いやすい構成になっていると感じますか。

2：あまり改善されていない



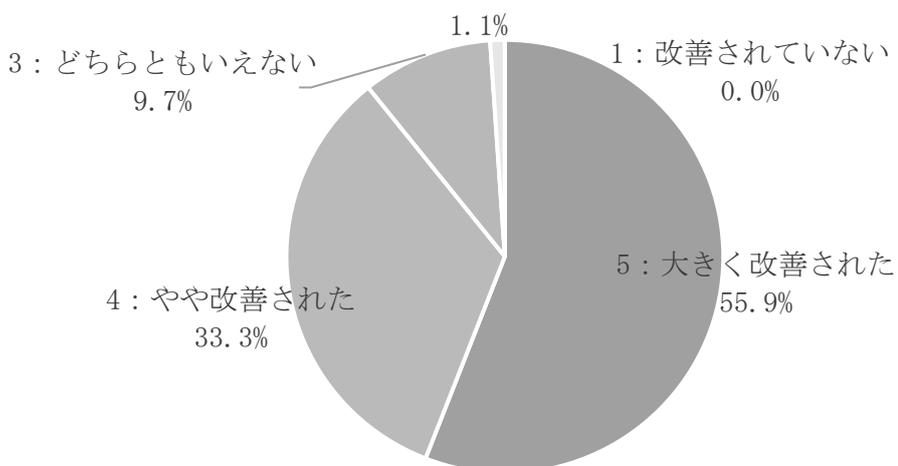
n=93

図 11-2 質問紙調査の結果（質問2）

### 質問3（記録の蓄積・活用について）

新しい様式は、児童生徒の取組や成長の記録を継続的に蓄積し、次の指導に生かす際に、（例：これまでの記録をもとに指導内容を考える、次の学年や次の担当者へ引き継ぐ など）活用しやすい構成になっていると感じますか。

2：あまり改善されていない



n=93

図 11-3 質問紙調査の結果（質問3）

#### 質問4（さまざまな実態の児童生徒への対応 について）

新しい様式は、知的障害のある児童生徒のさまざまな実態に、（例：言語理解や表出の得意・不得意、活動経験の幅の違い、視覚的支援の必要性など）対応しやすい構成になっていると感じますか。

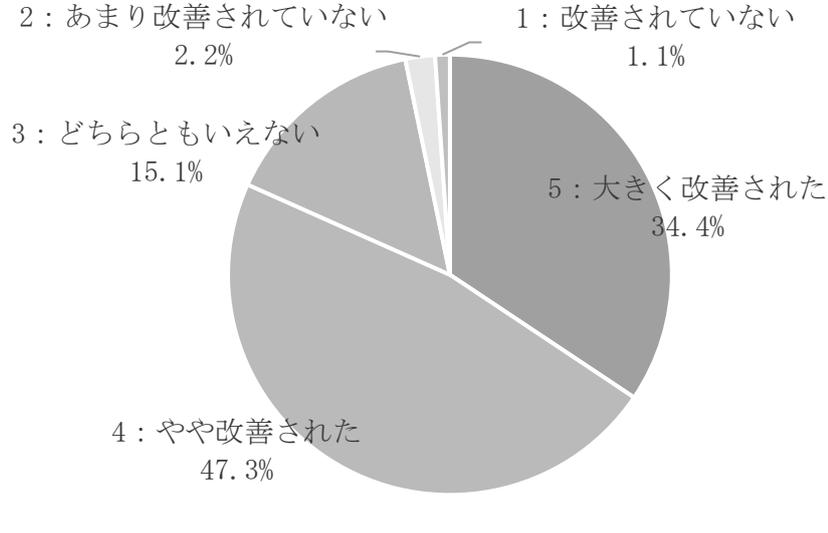


図 11-4 質問紙調査の結果（質問4）

#### 質問5（総合評価 について）

総合的に見て、新しい「キャリア・パスポート」の様式は、従来の様式と比べて改善されたと感じますか。

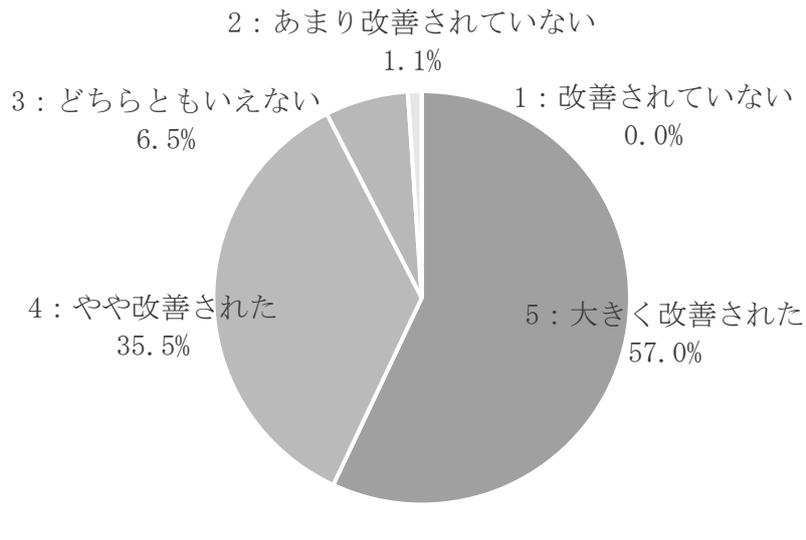


図 11-5 質問紙調査の結果（質問5）

## 2 考察

本節では、令和8年1月に実施した質問紙調査（質問1～5）および自由記述（質問6）の結果を踏まえ、新しい「キャリア・パスポート」の様式に対する教員の捉え方について考察する。自由記述は、量的結果の背景にある工夫点や課題に関する認識を含むことから、量的データを補完する資料として位置付ける。なお、新しい様式は令和8年4月から本格的に運用を開始する予定であり、本調査時点における回答は、継続的な実践に基づく評価ではなく、現時点での見通しや課題意識を反映したものである。したがって、以下では新様式の効果を断定するのではなく、質問紙調査と自由記述の結果から読み取れる可能性および留意点を整理する。

### （1）量的結果の総括

質問紙調査（質問1～5）の結果から、新しい「キャリア・パスポート」の様式は、自己評価、意思決定、記録の蓄積・活用、総合評価の各観点において、肯定的に捉える回答が多い傾向が示された。とりわけ、自己評価や記録の蓄積・活用に関する項目では「改善された（4・5）」とする回答が大多数を占め、新様式が振り返りや記録の実施を後押しする構成として受け止められていることがうかがえる。

一方で、「さまざまな実態の児童生徒への対応」に関する項目では、他項目と比べて評価が分散していた。これは、様式改善の方向性自体は肯定的に捉えられつつも、児童生徒の実態差が大きい本校の実情においては、様式を一律に適用するだけでは対応しきれない場面が想定されるためと考えられる。したがって、新様式の効果をより確かなものとするためには、実態に応じた運用上の工夫を前提として検討を進める必要がある。

### （2）自由記述を踏まえた評価の背景

自由記述では、新様式が肯定的に評価された背景として、①実施時期や活用場面が整理され、取組の見通しが立てやすくなったこと、②内容が簡潔で、学習や行事等の振り返りと関連付けやすくなったこと、③記録を次年度へ引き継ぐ資料としても活用できるという見通し、が挙げられた。例えば、「実施時期が明確でやりやすい」「無駄がなくシンプルでよい」といった記述や、写真を用意して想起を促す等の工夫を前提としながらも「かなり使いやすくなった」とする記述が見られ、様式の構成が日常の指導の流れと接続しやすくなったことがうかがえる。

また、「校外学習の事前・事後学習の様式が共通になったことで使いやすくなった」とする意見もあり、学校行事や体験活動に即した整理が、教員の活用イメージの形成に寄与していると考えられる。

さらに、「引継ぎ資料としても活用できる」との記述も見られ、記録を単年度で完結させず、継続的な指導に生かすという点で、新様式の意義が捉えられていることが示された。

以上より、量的結果に示された肯定的評価は、単に記入しやすいという側面にとどまらず、教育活動の節目に位置付けて振り返りを行うことや、記録を蓄積して活用することへの見通しが、様式の構造として明確化された点と関連していると考えられる。

### (3) 実態への対応に関する課題と今後の留意点

自由記述には、「そのまま使うことは無理だと思うので、何かしら担任の手は入ると思う」といった意見が見られ、児童生徒の実態に応じた調整を前提として運用する必要性が示されている。本校においては、新しい様式は児童生徒の実態に応じてカスタマイズしてよいという扱いとしているが、カスタマイズを許容するだけでは、教員によって調整の方向性がばらつき、様式の目的や記録の意味が共有されにくくなる可能性がある。実際に、「発達段階が低位の児童生徒用にカスタマイズする見本があれば親切」とする意見が示すように、何をどのように調整すればよいのかについて、具体例を伴って丁寧に示すことが求められる。また、校外学習の実施時期や複数回実施した場合の扱いなど、運用上の疑問点について「このあたりの疑問点が明記されると良い」とする意見もあり、カスタマイズの可否だけでなく、活用の手順や判断の基準を明確にする必要がある。

さらに、家庭と連携しながら活用していく上では、保護者に向けた説明と働きかけも重要である。自由記述には、従来様式にあった「家庭」「地域」の項目に触れ、「お家の方から書いてもらっていました」とする記述が見られ、家庭の関与がこれまで一定程度想定されていたことがうかがえる。一方で、保護者の協力により作成することを「視野に入れてもよい」としつつも、協力の程度は「保護者次第」とする記述もあり、家庭への依存が過度にならないよう配慮が必要である。したがって、家庭と連携を図るためには、様式そのものの説明にとどまらず、「キャリア・パスポート」の意義や目的、家庭が関与する場合の役割（どこまで、どのように協力を得るのか）を、学校として整理した上で丁寧に伝える必要がある。

加えて、活用の主体である児童生徒に対しても、意義や目的、活用の仕方が伝わるように取り組む必要がある。自由記述には、「児童生徒自身が、日々「キャリア・パスポート」のイラストや写真を見ることを楽しみにしていました」「児童生徒自身が見て振り返ったり思い出したりできたら理想」とする記述が見られ、児童生徒が様式を「自分の記録」として捉えられる可能性が示されている。この点を生かすためにも、担任が個別に工夫するだけでなく、学校として、児童生徒に向けた説明の観点（何のために作るのか、どの場面でどう使うのか、見返して何に生かすのか）を共有し、学級での説明や振り返りの進め方を蓄積していくことが重要である。

以上より、今後の留意点としては、①カスタマイズの観点と具体例を整理し、校内で共有できる形で示すこと、②活用手順や判断基準（いつ・どの範囲で作成するか等）を明確化し、疑問点が生じにくい運用にすること、③家庭と連携する際の目的・役割を整理し、保護者に丁寧に説明すること、④児童生徒が主体的に活用できるよう、意義・目的・活用の仕方を伝えるための働きかけを学校として位置付けること、の4点が挙げられる。これらを通して、実態に応じた柔軟性を確保しつつ、学校としての共通理解を保った運用につなげていく必要がある。

## 第4章 総合考察

### 1 2年間を通じた研究のまとめ

本研究は、特別支援学校（知的障害）において、「キャリア・パスポート」が学校生活や学習の経験を記録・蓄積し、それらに見通しをもって振り返ることを通して、次の学びや生活への意欲につながったり、将来の生き方を考えたりするための手立てとして位置付けられている点を踏まえて設定した。その上で、児童生徒が自らの学習や学校生活の経験を振り返り、成長の過程を確かめながら、次に取り組むことや将来の生き方を考えるための記録・蓄積の手立てとしての機能を、学校現場でどのように成立させるかという課題意識の下で検討を進めた。

一方で、児童生徒側には想起や言語化、記述の困難さが伴いやすく、振り返りから自己評価や意思決定へつなぐ学習過程が成立しにくい場合がある。また、教員側にも体系的な研修機会が十分とは言えない状況がある。そこで本研究では、教員が指導過程で感じている成果と課題を明らかにし、それらの課題に対応した支援の在り方を、教員研修と様式改善を通して検討することを目的とした。

令和6年度の【研究①】、【研究②】では、インタビュー調査により学校現場の実践について語られた内容をコード化し、成果と課題を整理した。その結果、多くの項目で「課題に関する回答が成果に関する回答を上回る」傾向が示され、現場では工夫や手応えがある一方で、指導の見通しや方法、様式・蓄積の在り方等に構造的な困難さが存在していることが確認された。

続いて、抽出された課題に対応する形で研修会を実施し、研修前後の質問紙調査の結果を比較することで、教員の指導観や児童生徒の変容に対する実感の変化を分析した。ここでは、課題に対応した研修会の実施が、自己評価や意思決定の指導において児童生徒の変容を実感できるようになることに一定程度寄与し、とりわけ研修前に実感が低かった群で向上が認められた点は、研修が教員の着眼点や振り返りの捉え方を整理し直し、児童生徒の変化を把握する手掛かりを得る機会となり得ることを示している。

一方で、研修後であっても変容を十分に実感できない教員が自己評価で約5割、意思決定で約7割を占めたことから、単発的な研修のみでは実践が安定して定着する段階まで到達しにくいという限界も同時に明確になった。さらに、令和6年度段階では、インタビュー調査で課題として挙げられた様式や蓄積の在り方に対して具体的介入を行っていないことが、研修で得た理解や意識の変化が日常実践の定着に直結しにくい要因となった可能性も指摘できる。

この令和6年度の到達点と課題を受け、令和7年度は「様式と運用」に焦点を移し、研修会の継続と並行して様式の検討・改善を行い、改善後の様式に対する教員の捉え方を整理・検証した。

その結果、新しい様式は自己評価・意思決定・記録の蓄積と活用・総合評価の各観点で肯定的に捉えられる傾向が示され、特に自己評価や記録の蓄積・活用では「改善された（4・5）」が大多数を占めた。ただし、「さまざまな実態の児童生徒への対応」では評価が分散し、様式の方向性が肯定されても、一律適用では対応しきれない場面が想定されることが示唆された。

また、自由記述からは、実施時期や活用場面が整理され見通しが立てやすいこと、内容が簡潔で学習や行事等の振り返りと接続しやすいこと、次年度への引継ぎ資料としての活用可能性など、構造面の改善が教員の活用イメージ形成に寄与していることが読み取れる。

一方で、実際に指導を行う際には、児童生徒の実態に応じた調整を前提とする意見が多く、カスタマイズを許容するだけでは調整の方向性がばらつき、目的や記録の意味が共有されにくくなる可能性が示された。このため、カスタマイズの具体例、活用手順、家庭と連携する際の目的・役割の整理、児童生徒が主体的に活用するための学校としての働きかけ等が、今後の留意点として整理されている。

以上を踏まえると、本研究の成果は、現場の語りを基盤に「キャリア・パスポート」の作成・活用に関わる課題を可視化した上で、教員研修と様式・運用の改善を組み合わせ、取組を担当個人の工夫に依存させるのではなく、学校として共有・継続できる形へ再構成していく視点を提示した点にある。とりわけ、研修を通して、キャリア教育を特別な指導として切り離して捉えるのではなく、日常の指導の中にキャリア教育の視点を位置付けることを意図的に共有したことは、教員が日々の指導を「キャリア教育の視点」で捉え直し、自己評価や意思決定を促す働きかけを日常の指導過程に位置付け直すことにつながったと考えられる。

また、教員の理解や着眼点に働きかける研修と、記録・振り返りを支える様式・運用の見直しを並行して進めたことにより、教員の実践が具体化され、児童生徒の変容を捉える手掛かりを得やすくなるとともに、学校内で実践が共有されやすくなる可能性が高まったと考えられる。すなわち、人的側面（教員の理解・視点の更新）と構造的側面（様式・運用による支え）の両側面からのアプローチを往還させ、一連の改善の流れとして整理したことは、特別支援学校（知的障害）において振り返りから自己評価、意思決定へとつながる学習過程を成立させるための実践的条件を検討する上で、一つの視点や手掛かりを示し得たものと考えられる。

## 2 今後の展望

今後の展望として第一に挙げられるのは、令和8年4月から本格運用が開始される新様式について、実際の継続的实践に基づく評価を蓄積し、教員の見通しや課題意識が、児童生徒の学習過程の変容とどのように結び付くかを検証していくことである。現時点の質問紙調査は「見通し」の反映であり、効果を断定するのではなく、可能性と留意点を整理する位置付けであるため、運用開始後のデータ（活用頻度、振り返り場面の設定、児童生徒の反応、学年間の引継ぎの実態など）を計画的に集め、学校として検討を継続する必要がある。

特に、児童生徒が「自分の記録」として捉え、見返して振り返りに生かす可能性が示されていることから、児童生徒への説明や振り返りの進め方を、担任の工夫に委ねず、学校として共有していくことが重要になる。

第二に、評価が分散した「さまざまな実態の児童生徒への対応」を中心課題として、カスタマイズの観点と具体例、活用手順や判断基準を明確化し、学校内の共通理解を保ちながら柔軟性を確保する運用設計へと具体化することである。自由記述が示すように、調整を前提とする運用は不可避である一方、調整のばらつきは目的の希薄化につながり得る。したがって、例えば「発達段階が低位の場合に残す核（何を必ず記録するか）」「写真・具体物・選択肢など支え手立ての具体例」「年度末の引継ぎで必ず確認する項目」といった判断のよりどころを「見える化」していくことが、次の改善段階として求められる。

第三に、家庭との連携の位置付けを整理し、家庭が関与する場合の役割や範囲を学校として説明できる形にしていくことである。「キャリア・パスポート」は学校内だけで完結する教材ではなく、児童生徒の生活経験と学習経験を往還させることに価値がある。だからこそ、学校が何を家庭に求め、どこからは学校が担うのかを明確にし、保護者が意義を理解した上で無理のない協力ができる関係づくりが必要となる。

加えて、本研究で得られた知見は、特別支援学校（知的障害）においてキャリア・パスポートの活用に課題を感じている学校にとっても、一定の参考となる可能性がある。特に、研修を通して日常の指導にキャリア教育の視点を位置付け直すことと、様式・運用の見直しを段階的かつ並行して進めることを組み合わせる観点は、各校の体制や実態に応じて調整しながら取り入れ得る。今後は、各学校における学部構成、記録の文化、校内の共有の仕組み等を踏まえ、研修の設計単位（学部・学年・分掌等）や様式改善の範囲（全校統一・段階的導入等）を調整する導入モデルを検討していくことが求められる。

最後に、研究の今後の発展可能性として、教員の学び（研修）と実践を支える枠組み（様式・運用）の改善が、児童生徒の振り返りから自己評価、意思決定へとつながる学習過程に、どのように関与しているのかを、より具体的に捉えていくことが挙げられる。以上を踏まえると、本研究は、学校現場の改善に資する実践研究として、実態把握から研修、様式改善、評価へと至る改善の流れを整理し、その検討の端緒を示した段階にある。

今後は、個別の実践事例について一定期間にわたる記録を積み重ね、例えば、どのような支援によって経験の想起が促されたのか、自己評価の表現がどのように変化したのか、意思決定の手掛かりがどのように具体化したのかといった観点から、指導過程の変化を丁寧に整理していく必要がある。その上で、学部間・学年間での継続的な活用を通して成長の見取りを可能にする評価の観点や方法を検討することにより、特別支援学校（知的障害）における「キャリア・パスポート」の位置付けと活用の在り方について、より具体的な示唆を得ていくことが求められる。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2018) : 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編 (幼稚部・小学部・中学部). 開隆堂.
- 2) 文部科学省 (2019) : 「キャリア・パスポート」例示資料等について
- 3) 青森県教育委員会 (2012) : 生きる・働く・学をつなぐキャリア教育の指針<総論編>.
- 4) 石川和博、任龍在、内田誠、霜田浩信 (2024) : 特別支援教育におけるキャリア・パスポートの導入と展開. 群馬大学共同教育学部紀要、人文・社会科学編、第73巻、131-140
- 5) 藤川雅人、杉中拓央、菊地一文 (2024) : 特別支援学校 (知的障害) におけるキャリア・パスポートの記入の難しさとその対応. 弘前大学教育学部紀要、第132号、175-181

## 参考文献

- 1) 文部科学省 (2018) : 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編 (幼稚部・小学部・中学部). 開隆堂.
- 2) 文部科学省 (2018) : 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 各教科等編 (小学部・中学部). 開隆堂.
- 3) 文部科学省 (2019) : 「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項
- 4) 文部科学省 (2022) : 「キャリア・パスポート」に関するQ&Aについて
- 5) 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 : 特別支援教育リーフVo1. 14、キャリア・パスポートの作成と活用
- 6) 青森県教育委員会 (2012) : 生きる・働く・学をつなぐキャリア教育の指針<総論編>.
- 7) 青森県教育委員会 (2019) : キャリア・パスポートの活用について
- 8) 青森県教育委員会 (2019) : 「あおもりっ子キャリアノート明日へのかけ橋」  
[https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/kyaria\\_pasupoto.html](https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/kyaria_pasupoto.html)

## 謝辞

この度、このような研究の機会を与えてくださり、研究助成をしていただいた公益財団法人みずほ教育福祉財団に深く御礼申し上げます。また、本研究を特別支援教育研究助成論文として御推薦いただいた独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の皆様にも深く感謝申し上げます。

昨年度、私は令和6年度特別研究員（地域連携型）として、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所に1年間派遣していただきました（本稿の第2章で示した研究はその際に実施したものです）。多くの貴重な経験と学びの機会をくださった青森県教育委員会と独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の皆様には感謝申し上げます。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所では、障害のある生徒のキャリア教育の充実に関する研究（キャリアチーム）に所属しました。研究や研修を通して、キャリア教育や「キャリア・パスポート」に関する先進的な取組について学ぶことができ、知見を広めることができました。研究チームの代表として御指導いただきました小澤至賢先生をはじめとしたキャリアチームの先生方、特に本研究を進めるにあたり、昨年度から2年間に渡って、研究の構想からまとめまで熱心に御指導いただきました石本直巳先生、今年度、多くの御助言をいただきました榎本容子先生など、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の多くの先生方に御指導いただき、大変励みになりました。深く感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたり、所属校である青森県立八戸第二養護学校の小笠原雅和校長先生をはじめ、青森県立八戸高等支援学校の管理職の先生方におかれましては、本研究に対する御理解を賜り、御協力、御指導をいただきました。質問紙調査や聞き取り調査に御協力いただいた青森県立八戸第二養護学校の小・中学部の教職員の皆様と、青森県立八戸高等支援学校の先生方におかれましては、御多忙中にも関わらず、快く研究に御協力いただきました。深く感謝申し上げます。特に、本稿の実践研究においては、伊澤先生、尾崎先生、葛西先生、大澤先生、中川先生、日山先生、佐々木先生、北川先生、間山先生の9名の先生方には、多大な御配慮と御協力をいただき、心より感謝いたします。先生方との「キャリア・パスポート」の様式改善に関わる話し合いを通して、多くの学びと気づきを得ることができ、研究を深めることができました。また、昨年度、同じ特別研究員として県外各所から独立行政法人国立特別支援総合研究所に集まり、1年間、共に研究をした5名の先生方におかれましては、特別支援教育について熱く楽しく語り合い、励まし合い、新しい視点や様々な学びをいただきました。

2年間、本研究に携わってくださった多くの先生方に厚く御礼申し上げます。本研究での学びや経験をこれからの指導に活かしていけるよう、励んでまいります。ありがとうございました。